

分娩後60日以内に何頭の牛が農場をさるのだろうか？
 周産期管理は、うまくいっているのだろうか？

分娩して2ヶ月以内に廃用になる（農場を去る）牛の数とその割合を見ることは重要です。その時期に農場を去る牛が多ければ、それはせっかく分娩しても十分に乳を出荷せずに廃用になってしまっているのですから、経営に与える影響は重大です。その時期に廃用の多いということは、おそらく乾乳から周産期の管理に改善すべき問題の多いことを示唆しています。また、同様にその時期を生き延びた牛たちにも、その後の繁殖などに影響していることも十分に考えられます。

図はDC305で打ち出した、3年分の廃用牛及び死亡牛の数を廃用になった搾乳日数ごとに打ち出したものです。

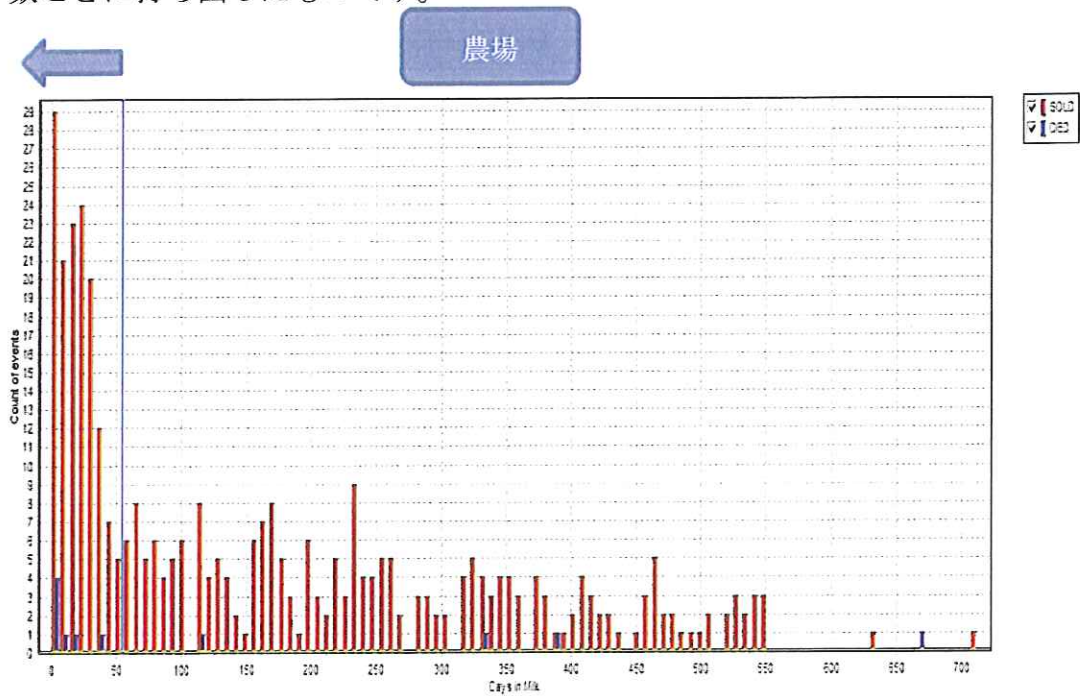


図 1

例では、分娩後60日以内の廃用の多いことが一目で分かります。全廃用牛の43%が、この分娩後60日以内に起きてしまっています。農場の平均産次数は、2.2産と非常に若く、古い牛が生き残れていない状況が想像できます。3年間の総廃用頭数は、ちょうど搾乳頭数と同じ数になっていることから、3年で牛が

総入れ替えになっている勘定です。増頭や個体販売が難しいのは、この部分にあることが理解できます。私の行っているデータのはっきりしている検診農場で、この比率を比較したところ 11%~43%まで、様々でした。この 11%と少ない農場の平均産次数が 3.3 産に対し、35%を超える農場の平均産次数は、2.15 産でした。

また、この数値は残念ながらフリーストール農場で高く、タイストール牛舎で低い傾向を示しています。フリーストールでは、乾乳後期から分娩、周産期とペンの移動や競合、さらには餌の濃度（アシドーシス）などの影響によるものかもしれません。全廃用に占める、搾乳日数 60 日以内の廃用割合の許容できる数値はわかりませんが、より少ないほうがより良いことははっきりしています。

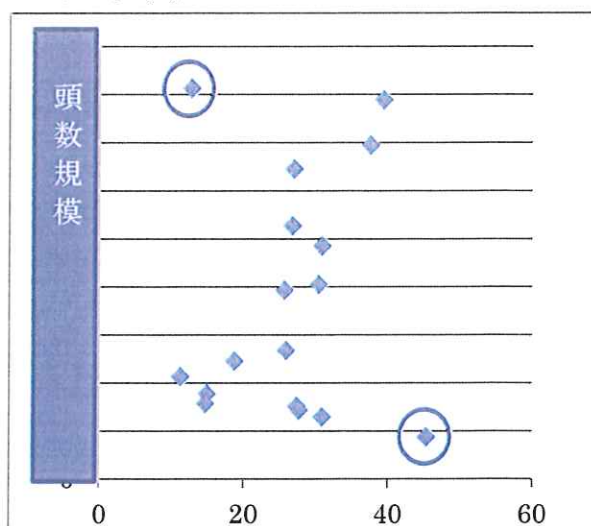


図 2

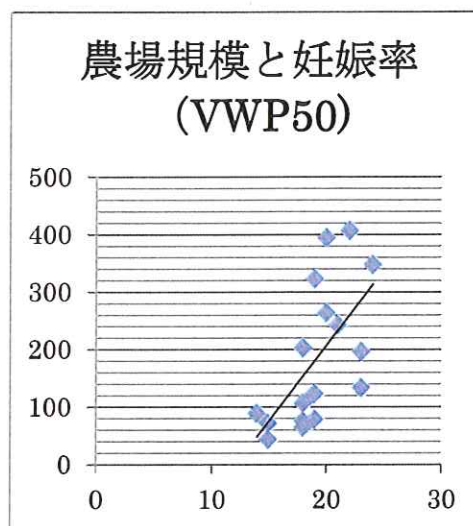


図 3

図 2 は、縦軸が頭数規模、横軸が総廃用頭数に対する 60 日以内の廃用率を示しています。大きくなるとそのリスクが高くなる傾向はありますが、左上丸印と右下丸印のように、大きくてもそのリスクの少ない農場と小さくてもそのリスクの高い農場があります。自分の農場の周産期管理のレベルを表す数字になりそうです。是非 DC305 で確認をしてみてください。周産期管理を見直すよい機会になるとおもいます。また、この 60 日以内総廃用頭数と総分娩頭数を比較しても、よいでしょう。図 3 は、図 2 と同じ農場の規模とボランティアウエイティングピリオド 50 日（自発的待機期間＝分娩後意識的に授精しない期間）での妊娠率との相関で、こちらは明らかに規模が大きいほど妊娠率が高い傾向を示していますので、この 60 日以内での廃用割合と繁殖との関係を単純に示すことはできないようです。

我が家の2頭の宝牛！

どの農場にも、「我が家の宝牛」は、いるものです。

S農場には、立派な牛がたくさんいますが、中でもこの2頭の牛は素晴らしい宝牛だとおもいます。



宝牛 1



宝牛 2

我が家の宝牛 1 は、昨年 10 月 30 日に 11 産目を無事終えて、搾乳日数 70 日目に、人工授精をして、1 発受胎しました。そして、今年の 10 月 18 日に見事 12 産目を無事すませ、現在順調に泌乳しています。11 産から 12 産の分娩間隔は、353 日でした。お見事です。12 産を迎えるにあたり、この牛をなんとか無事に次の泌乳につなげたいとのことで、無乾乳処置での分娩を試み、全く問題なく周産期を乗り切りました。従って、この 12 産目牛はすでに連続 400 日以上搾乳を続けながら、その間に 2 回分娩をしたこととなります。まさに宝牛ですね。宝牛 2 は、文字通り首のところに、「小判マーク」がついています。そしてこの牛の産歴は、過去すべて一発受胎ですべてメスをこれまで 4 産続けています。はたして 5 産目も、この宝牛ぶりはつづくのでしょうか？素晴らしいですね。

今年も一年間ありがとうございます。春には、新人獣医師も入りさらに活気のある年になりそうです。来年もよろしく願いいたします。

来年こそ、事務所全体で無事故無違反を目指します。

黒 崎